

5

4

3

2

1

20

9

8

7

6

5

4

3

2

1

10

9

8

7

6

5

4

3

2

1

0



門號
卷 14

村田

再編占夢南柯後記序

洪容齋曰。漢藝文志七略雜古十八家。以黃帝長柳占夢十一卷。甘德長柳占夢二十卷爲首。其說曰。雜占者。紀百家之象。候善惡之證。衆占者一。而夢爲大。故周有其官。周禮大卜掌三夢之法。一曰致夢。二曰觭夢。三曰咸陟。鄭氏以爲致夢夏后氏所作。觭夢商人所作。咸陟者言夢之得。周人取焉。而占夢專爲一官。以日月星辰占六

夢之吉凶。其別曰正。曰噩。曰思。曰寤。曰苦。曰懼。季冬聘王夢獻吉于王。王拜而受之。及舍荔于四方。以贈惡夢。舍崩者猶釋采也。贈者送之也。詩書禮經所載。高宗夢得說。周文王夢帝與九齡。武王伐紂。夢協朕卜。宣王考牧。牧人有熊熊虺蛇之夢。召彼故老訊之。占夢左傳所書尤多。孔子夢坐奠於兩楹。然則古之聖賢。未嘗不以夢爲大。是以見於七略者如此。魏晉方技猶時或有之。今人不復留意此卜。雖市井妄術所在如林。亦無一人以占夢自名者。其學殆絕矣。又李瑩財貨銘曰。財貨將至。夢寐可尋。或穢或虺。乃玉乃金。穢可親歟。虺可玩歟。敢獻斯銘。以激貪夫。由此觀之。夢非故有吉凶應報。而爲有吉凶應報者。偶然耳。諺曰。癡人面前不說夢。余所說。豈夢寐吉凶耶。人間萬事莫非夢者。因命是篇。以覺蒙昧云。辛未初冬朔 玄同陳人識





り居て人の詩と賦、文と讃ふ。檢ふて左の壁に貼て常住坐候。不
え言ふことを喰じて。一字の損益あるとたゞ改む。余が
毎歳の著編は只速く成りて利害との底よりて下よびも藁本と更む。し
五六日。かく時代を定め地名をト。人名と撰。許多の脚色を巧生し。もろして
藻と饒す。またの動不仕し。文へ意ふ事ふ任へ。且くも止ふ。テ専遠
波のうらやまひつた。ね帳帳あるとたゞ粘りとて改む。余嘗試編小
一風とて文と雅俗とてうとりども。猶云を好きとて婦幼ふ通し易く
する處。又唐の俗語と切ぬをせど。こそ流者文字を目されど。讀ふ隨く
頗りけりが。但その越難劇と似る。あれども難劇と同ドク。又難劇よ
似る。あれども難劇と含むるが如き件々里耳に入ることあり。昔とての。そ
今年著と不。明年へ皆忘る。と歎きて年この著編。指を傳ふ至りへども。未嘗言
う。かうえ。ゆく。かうらふ。身を嘗んだ所云聾者蛇よ懼ぐるの類うべし。

玄同陳人再識

三七全傳白夢南柯後記卷之五

後序第一

東都曲亭馬琴編次

附言

ちよきの物たり。天文十九年五月起て。同二十一年五月。前後
僅よ三年を経たり。蓋前後四巻よ説とて終。天文十九年
冬十月六日。赤根半之進又子支婦。蟻松曾太郎。木浪速の
法善寺に考妣の善提を吊ひし。敗戦全兵が養母
晚稻が夢の事。孝子全兵千日墓より施主と僕て。しめめて父の
仇人を効く。敗戦四五六年。暗ふ全兵をたとふと蟻松曾太郎
面を犯して順勝を諫ること。赤根半之進君令承受て。本谷山へ
赴く。櫟本の林原よ全兵赤根半之進を埋伏さる。晚稻

自殺して。下りて素性を物語る。赤根半之進更に主君乃
小刀を獲る。四五六全々後赤谷山ある本精塲と號す。順勝
怒て半之進を砍る。とある。また進蟄居のす。順勝曾太郎小
金て半七を代の中侍へ滴す。辨天堂より半七初花より王枕
以前陽法と正して陰より半七初花を助す。また十圓。代の中侍の候
前件四巻より盡。この編は笠松平治がよ起て。まきく半七も花が
顛末を説う。今聚量て二件ともうの例の書肆が爲ふこそ。

秋兩の笠松上

半七初花がす。その曉より曾太郎より消息にて。密ひ半之進ふ
告ひよけべ。赤根が闇宅更ふ一層の憂苦をやせ。また進が憤へ
さうふものいひど。三勝へひど。若しにえよ胸と苦しめ。か子の玉代
ありひゆふ。玉枕は前慈悲深く。とす。あせば。半七初花の密ひ
會ひ助らま。代の小舟ようら無むれ。水門より腰を生ひて。うち
受けがせあてのとおびえて。又慰めよ。あて細れど。ほ詫う
良人のとくに限らせり。日数も。そひふと黒く。仰や
あんと同くもろき物をひよ。肩根をひく隙のきけきば。匿むと
それど。私率放女さんどみをや効て。被外は集會。こふ園居て。
主の陰茎いふもうてく。りん柱ふ身を備うて。瘡を楚と押て
と。浩然よ。腰元よ。使つて。女の子遠く。まつて。園居。こゑ夏山
さまの。猪木ひぬ。と告よけ。二勝忍たびと撫。とく。うるぬ。
とをあらめ。まづ客房へ誘引てよ。とつじ。まづ。庭もあり。まづ
去程よ。三勝へ弁取て。鬚搔持て。帶を絆びとえなどして。縁頬

候ひふ客房の障子を閉つ。裏より入るべ。園苑へは丈箱を京深
みくる袴衣ふ。向寺塔の衣。二つを下。下襲衣ふ。そくよ攝箱ある。
袴衣ふ。練乃帽す。紙戴き。夏とへ。おき。緒の色異あるふ。仁田山
細の排裏衣ある。袴衣ふ。向寺塔の衣。二つを二段襲て。あらの
徳貫よ。排裏ある。袴衣の下ふ。僅ふ三歳の平太郎が熟睡せ。
抱け。が。其よ帽す。素う。従者へ後門の裏よ慰とちや
くて。庭の築垣よ。あくよ。立つて。被箱の油單垣より上ふ
些一々見えよ。當下ニ傍れ。園苑夏山。あよ對ひ。送よ秋の冷す
き。安否報。同善。と祝へ。そぞり。家公曩服ふ殿乃
勵。元と。学部。せぬひ。と。愚。と。親族。と。も。訪ひ。訪
る。紙えせば。百日あまり中絶する。ふたり。ある。と。のあく。と。新婦
まくはれて。俄頃。ふかく。訪せ。の。物語の。と。さや。ひと。綺羅。うだ
打ち。ふそ。來り。ひき。と。夏。と。の。外して。寝底。意と
推量す。寢起。ひよ。か。ま。ど。面。ひよ。ひよ。召。ど。数。多く。称。ど。も
家公の側室。平箱が母ふは。是。が。た。う。の。衣着。と。く。ん。と。く。
驕。ま。う。と。く。誰。う。へ。う。ん。ひ。う。其。よ。築居。世の務。の。疎。い。け。ま。ご。
それも良人の志よ。情。う。と。その。髪化粧。公芳。と。紙推。も。ひ。ね。
特。ふ。け。へ。限。う。あ。月。數。も。化。よ。黒。う。ん。ど。宝。刀。の。従。方。へ。あ。れ。ざ。る
や。加。旗。昨。後。の。す。ま。七。日。よ。う。れ。悟。も。び。う。た。う。と。通。波。中。の
風。吹。く。の。ほ。う。戸。ゆ。き。れ。種。ど。開。う。う。良。人。の。因。門。あ
う。え。つ。る。出。や。あ。と。と。う。れ。歎。け。ど。歎。く。の。そ。う。女。子。の
か。ひ。あ。き。見。子。平。箱。へ。の。處。月。よ。う。瘡。病。す。と。今。よ。差。ど。寒。熱。

と。病氣み。何商談ん暇も。只夏と對ひ。事へん
か。とらひつ。おひう神の物詣が。時より殊更。懸ひ。神徳
佛力と。春日の社へ月詣する。驗へうけども。家公より。あん家
う。恙ろく坐むる。これ。春日の擁護ある。すよとの使ふ
り。半七が。半七が。君所の沙汰ゆえり。と。賽を
幸ふ。夏と。併て推懸客。物うへたれまつた。と。被り。身
うち籠て坐もう。顔の色も常る。す。半七に。うけん。
辛く。命を助ア。玉枕。前。の。靴と。闇て。癖を。搔く。に。中。推量。と。べ。ひと
こそ。姫の前。靴と。闇て。癖を。搔く。に。中。推量。と。べ。ひと
痛。と。半。せど。三。筋。眉根を。簪。ぬ。瞼。を。た。の。す。七。と。名の
隅の圓。くる。身。ど。宜。彼。又。良人の肉身。あん身。が。生ぬ。の。
と。さ。の。情。げ。宣。ふ。勿論。半七。不。争。不。擧。こと。つ。んで。の。の
み。う。ぐ。ら。その。水元。あん身。が。姫。初花。どの。淫奔。ふ。も。され
る。こ。氣。の。悪。さ。智者。も。勇者。も。き。五。迷。く。猪。居。ね。が。う。
う。舊の人。う。む。もの。じ。づ。ひ。牛。く。も。も。う。と。些。の。ゆ。氣。よ
う。う。日。來。よ。紙。ぐ。く。角。牙。ど。く。茨。の。刺。を。柳。の。糸。よ。す。理。と
通。く。うち。微笑。こ。姫。よ。の。何。宣。よ。や。う。ん。五。縛。へ。あん身。乃。妹
う。う。便。や。あ。う。べ。怪。の。半。セ。と。生。ぬ。り。と。て。憎。じ。く。恨。が。あ。う。や。笑
い。う。恨。が。あ。う。教。す。た。う。ち。ト。福。ご。妹。よ。せ。よ。雪。を。花。ど。の。あ。家。が
兄。の。二。代。の。軌。柄。氏。と。ひ。福。ご。う。ひ。太。和。よ。は。元。名家。の。末。五。縛。の
あ。身。が。姫。よ。り。と。も。又。育。因。う。の。身。が。妹。妓。界。の。母。が。先。と。裏。す
す。う。淫。義。と。笑。う。と。う。う。バ。初。花。の。養。ふ。細。の。淫。奔。く。叙。母。に。み

御の淫姦う。おん弟がひよ同て入り。異父の姉妹でも。生涯すま
まきひどく。衰めふ暁とやらん。日本の妬み死匂あへど。新婦は前
倒て被飾させ。すちがみつひよあて。音備とまよ隠せを。おん弟が
母屋へ居んとえ。馴ての妹君がる時より殊更ふ。音備ゆきつゆ
竹。おん弟の妹ふくそと。あごを笑ひ。むろひ火と。煙つり
らきて墨花も。思ふええぞ面報する。福夜の夜経。經國。
うちのぬる宣ふ。おまえの解るせど。かうじ時五六年。おひ
ほそりて癪をせぬ。花あるとねじよ移びよ。かく絶てゐなりのと。
讀みよ證文を。生一歳まで四十あまり。數も既ふ小動のつむ
近きよ死り。まづく。夫婿執て何れせん。児孫の立るやも羞もむや。
嫁うれびとて理うれう。妹あつりの秋夜ひだりと。膝立身
おば室を花も。おへどよ。小膝立む。傍つてよ。夏ひ後方え。
ちがく密と。お母の袂も。おちうれと。おふういろく。揮放されて
又撫禁。母お氣こ直て怪うげや。腹ときあたるやあくとも。聞翁
られて坐しまそ。母屋へ來きて声す。諱ひまへの人へ見まし。
嬌早ある胞姉妹の賢女貞婦と誉まれ。松の操と今さらふ。
易て送よ効く。顔よ相と見せあり。血で血を洗ふ世乃縁ア。新
護と後ふ只悔く。おびともあん。外伯母お氣へよ。おえ
ゆきゆきと。おとせみ。慰てこそ遙近よ。訪せのひーくひもあれ。浦
外伯母よ。真の胞姉妹ふとせがこそ。つすれどよ。おも寢え回答
おれす。紙も回答。うち腰に。おもひのうち。それも闇ぬ誠

奇一せふつる親の法要と。ちひして許をすと勧解る徒充さ
慄怖ふ。ごろふ巻きる毫毛と背あらせの三猪の入向かやうに冷
笑ひ。母ひひくらでひつゝ肩んこそ。加勢ふ來すを「射婦」。川寮
口付へつと爽さう。五口備ゆ方々卷てぞ候。ばせと云号。初花の
お元の娘の前。彼は毎年ふかう。平紙ひくらと沼も守じ。そ
すりらふうりあひて。乞夏夢こそ在らる。と取も著え。波潮嘵
せられて。夏山の急堆ふ。自よ夕陽の映みだら。袖の涙の兩儀。又
不すむもうすけ。論へ參盃と毫毛も。副帶引緒立あぐ。
夏山にも宣ふ。ソバツのミ狂女と同名。家公ふありであ。迷惑
さん限く。うれど。そとも執次りのへす。瘡病ふ。平紙ふ。面ち
うたとびひりと。誇ほらす。といふせど。母立うぬる派
ゆふ。引ば忽に搖覺されて。よと鳴る草太郎と。袖ふ抱緒
敵つけても。往止ぬ。子ふせんと。ぐく。やまふ身と起と。夏ふ。うゆ
室を荒へ。こうう母屋ふ。遺ど。も。闇うかり。孫廟。縁煩の障子
開て出んと。それべ外面ふ。まうら。ぐく。君所より。おん使
さうじらふ。と。門が。吐嗟と。よと。二人が。抱ふ。轍と。巻きく。止め
まうら。うよ。まうら。と。ふくらま。と。ねが。夏ふ。と。ふくら。あん使
わうと。門声と。喰て。うつて。ゆく。と。ゆく。今。一時。が。家公の生死定
めを。うる。此方へ。來。あせ。と。藤。と。う。案内も。うる。支の宿所先へ
立つ縁頬。と。土居の松戸。窮。うれ。袖うち。合と。袖の中。あらゆ
ゆふ。侘とう。納戸の。かえ。と。避。と。避。

秋雨の笠松下



物の定め。玉のぐら。三猪へりよしく。幼もぬりある。床の懸物。うやし。
物のくらへりよしく。納まふ。半え進へ衣裳を整。障子左右に開して。式
臺まで出迎へ。今きくと往行よ。庭門陥へと後者木が昇へ。轎子と。
數達の半え。横さまは。著三べ。半え進支婦礼儀西。榜子の
戸とあけん。とくまび使者へ別人ある。赤根が二男平健。享年
二千一歳。稚本の二代の笠松守長。よく相貌秀。きいと向く又萎く。
病中あれへ月額。無色のぐら。黒ければ。眼睛。えい。茶褐の肩衣
長袴。將子。先に坐を刀を織。突立て。搖。坐。被首是首戒。偕と
て。うち絶ひ家する大人。外母公も恙。や坐する。親子の恩義。へこれ
私。瘡病。みて。龜居。ども。君令。膨。よ所。もん。使。と奉て。笠松
平健。發向せ。す。後者木。汝。わく。退て。門外。且。す。と。と
りそが。立。湊赤根。ゆ。役令。されば。上坐を。許。と。刀。持。床間を
背。坐。て。居長。ち。す。と。坐。と。扇。つ。ひ。も。重。く。匂。殊。り。先父
不三猪。へ。呆。果。て。うち。瞻。君。訴。よう。もん。使。とい。や。く。喉。門。と。
れひと。けん。る。と。ひ。よ。此方の二郎の笠松。ど。は。や。君令。されば。と。そ。
駄。と。駄。とも。ひ。み。せ。ぬ。虚。物。件。ハ。瘡。病。の。熟。ふ。や。ほ。され。か。ひ。ん。と。
ふ。と。え。る。ま。近。す。れ。み。せ。と。と。推。黙。と。せ。そ。恭。と。ひ。と。低。ま。の。ね。ほ。ま
る。そ。う。と。か。そ。ひ。と。と。づ。ご。も。用。居。の。お。ま。れ。が。設。む。せ。ご。あ。の。隣。す
く。そ。う。ま。ち。き。と。か。そ。お。せ。か。お。せ。か。と。か。そ。お。せ。か。と。か。そ。お。せ。か。
管。待。む。乃。守。と。憚。る。貧。素。仰。の。お。け。と。か。そ。お。せ。か。と。か。そ。お。せ。か。
ま。ひ。と。と。笠。松。扇。と。膝。よ。衛。と。赤。根。半。え。進。謹。で。承。と。没。り。な。
二月十七日。赤。苦。り。木。猜。猿。と。斐。風。流。士。の大。刀。と。う。出。と。ぎ。ほ。の。
お。ん。使。と。さ。し。請。る。ぐ。太。刀。ハ。失。う。と。傷。り。と。こ。直。て。進。せ。と。正。後。

二百日ふ近き光陰とづゞとふ送りしへ偏ふ主君を侮るふ仰う。それのみくらば長男ませひ犯所を脱出で。淫樂事車とせり。これもするの不祥きんや。うて件の自殺と。柴浸の刑み行三説ぬ。併その罪又子の間ゆう。此彼犯とこう怪をよあひ。格外の慈愛をりて。今日切抜せしもる柔仰の事件のごと。述も又ぬよ三勝へ。はみも筋堪ごとす。落る涙ふとむじ目拭ひ。ひと恨一げふ平船とつぶとすと哽うて。犯の危窮とすみがても。すし宥ゑ子の道。すまで孝みあひばくも。又が頑別え使へ。推辞とも推辞べまふ。撰擇されを牙の幅よ。病を推て犯の宅を端荒に來る氣刻り。現迹ある世うるう姉へ嫁と死りやか。新婦と孫く死ひぞあり。又犯の死を便と。使ふ立て天ともあそれぞ。幼推とれみかくさと。鬼くもとれみかくさり。よ。の多く。その子ナで。公神天魔ふ奪れりん。使ふ立て君の君形見。手へ惜きゆど。其の父公ぬ當家の威殿伍子胥死して吳王滅び。范増去て楚國頑く。世の常言も今更。ふとひよれて哀しや。ど世ノ恨。又牙を墓み。一声高く泣沈めば。平船へうち仰。モと呵と。空笑ひ。又口競う。故事歴直躬が牙を代んと。親を被ふて名を取し。廻魯聖の取ざる下。遠き漢土へとまれかれ。近く秦朝保元のむ。一人とづべた典既義朝こ臣又為義と。したる勅令下されば。是非よろび。賞へ臣の求るふ。四罰ハ居の行ふ下。豈私とて論せんや。この家よ男よるりの。家ふ在て人犯よ事。仕ての禄よ死を患參兩うづら全くも。どうあれ悲言傍痛と。

炮矢でよ撃それば半之進莞尔と笑ひ保元の順逆ハ先後既ふ
えを論む上へ是方牆下へ私子仇をもと三綱紊也と
人道立也。又君も又如此す。使者の人伴てうえぐて全く
まもんの心僻る。こゝへせもありぞ眼を瞬く。ほとて唇を撫せば。
こゝへ忠義とつべき歎する馬鹿りの主とあらば。傳頸列玉歎
袖を拂てるので去ざる。言承せぬハ拿代惜ひや。のみ争奈を
情ひ。あらば仰を推辞るや。のみ争仰を推辞まうまん。
推辞がへ切腹の用意もとつをせぬ。また進座と立ては沈
らる女房と信とんすてやよ三務。隠て覺おの上るおとす。
かく武士の妻ふれど縁おのお交壯断刀。どうくりてと焦躁
みぞを取ゆるみどりに拭ひ。ひそか拂ひてめ拂え。引揚の水も
陽とあらじ。さとひふ早死のせと。うべども又らひうねて。すすふ
身を起し。國遠け。有りと。お通陶五郎ひづであれべき。
せあてまし。宅ふと。うら草ともあらう。の死。まく
復房ふ妹へさんど。良人の末期と外すて。面牛せぬへ鬼旅蛇旅
ひ。腹貪さなど。只ひと。こもふと。赤根だ。すと。よ
の。ある。書教ど。ゆかくてゆ五。脩の墓。あおと。かりへと。
生雲の神や。結びけん。今ふと。あね悪縁の糸の糸を。いふせん。
と。潜然として。納戸の。と。と。と。と。と。と。
声と。うけ。内室且く。圍り。肚割刀。こよ。腰。と。
扇を取て。車を進ふ。投ふ。死。腰。と。右。と。受。扇。と。用。て
刀と。と。間。平。死。膝。と。寄。せ。式。死。法。み。と。う。と。自。殺。と。辞。ま。

真の武すまあぐをも。傳頸刎らぐ。罪犯員れども當家の家
廻一等す紙降られて。古例より往く。扇腹。又腰の親子の好也。平幅
つづり上て。亦是晨の會こと。説示せば。すえ進へ。扇をうる邊て
嘆息し。その罪よあぐ。どうじゆ。志と述る。とれへ。君の罪を譲る。ふ
仰う。すよ諒言容されば。死ある。あよ。米谷。ふて。肚うれ切也。
唇よ疎々。せきもん。とぞひこも鷦鷯の嘴。齧齧て。ふ死て。蓋
あり。死の意念。これやで。とり。翁祖。扇を取て。戴。さそりと
隣ね。抜く。平幅。又の。うち。三勝へ。党。殺す。やも忍。走りよる。ハ
金松の妨をも。と長襦の。裾。離れて。寄つけ。左。右へ。横も。
右手。ふ携る。矢。歩え。進見る。ふる堪。妻の。帶際。房。膝。あ
押して。動せば。ごみ。溝。と合掌。それば。健氣。心。既念。わ。と。平幅。も。

父が背後。玉刀尖と。肩。う。内りと。突。出。又。内。して。引く。又。を。
う。直。う。又。が。肚。帶。の。結目。の。あう。と。弗。と。断。ま。が。を。と。新。
帶。と。ち。ふ。鮮。血。さ。う。と。滴。下。大。腸。小。腸。長。す。ふ。と。う。垂。下。金松。
お。づ。り。の。櫻。下。又。と。捨。て。腎。丹。又。控。と。倒。す。青。み。信。と。見え。う。未
ま。え。進。れ。う。く。ふ。うち。も。騒。が。が。ぞ。發。見。あ。く。も。襖。し。よ。汝。あ。く。
ま。あ。づ。る。不。め。う。血。き。の。常。る。が。ざ。る。り。の。い。ふ。毎。よ。呼。吸。緩。急。れ。
深。瘍。脛。ぬ。と。あ。う。う。が。ら。そ。の。せ。ん。や。う。と。え。う。る。こ。又。よ。代。死。ん。と
う。う。の。志。う。ぐ。け。き。ど。没。す。金。松。氏。と。胃。セ。ー。ぶ。コ。う。す。ふ
あ。ぐ。う。う。と。死。も。そ。け。と。聰。く。察。する。言。の。ま。す。今。ぞ
敵。も。く。ふ。の。為。ふ。恩。愛。の。源。薦。かる。膝。の。放。め。ば。三。勝。の。慘。忙。き。

弟を記し。平地をうんて吐嗟とたぐり。先づまのひへや折易き。
玳瑁の弁の簷をこううわ糸と髪長を別日よりうりけり。然と
腰うりくすりやく抱き起せば平地の眼を瞬て息を吹きと公
外母に前假初るがら。乞ふあく痴惡言をさせ憎とむがりけり。
されどと隠てうじども。と下めよう明向ふ主君の内意をほげ
かうて親と罵り死と促せしハ實ゆるゝ福と五百生口を算りの
生焉やせん。平地がけへの自殺ハ全く養家と断みあらば。且て是
君又の為うりと。よ每よ流生する鮮血の上へうし傍み作らんと
まう後三猪の背うり抱き箇れ。やよ平地の焦躁の危くん
つとあくべまもせん。且く絶死病ゆり。虚言うりとまうじて、
ちの獸よ比へつ。ひ罵りする女子の淺じう。家公のよまうりの
かぐりの志みうらんや。さうみかうけり。口の今ハうりく
秘し。妹ハ何れよまとこそ。夏山は前ハナゴトもどや。紀子夫婦
一生の別まともううごとふ。とくべ平地改と檜母みの妻みの豫
え。学ん放まことゆふ。今亦テヨ注あらひとふ。おのづ黄泉の障と
あらん只うち捨て置き。抑此度又兄の厄難つゝゆもとく極ひ
進みせん。と千くふか死苦をても。才浅けとバ謀畧る。げと唇
聖とあせば。とや限ある月数ゆ多たる。その夜兄公の濡衣のうり紀
念を立す。紀とちりの誠よして皇天の憐めバ幸にして。余よ悉
くとうじも。これも又兄の罪をやうさん。所詮平地が命と捨て。又
兄の罪と贖んとぞ。どもこのが居よ。見そえうのぬ瘡病。とどよ
かううぬうひうねて。母と妻とふ故意と考。紀の歎と吉妹子が。

侯と硬よ搗流し。只ろづくと遺筒ふ。通宵筆を染字す。我が
八声の鶴も乱且啼。曉方ふらひもろけど奉輪到本火急の辰
状病を忍びてそがまへ。とくと柔主と仰の疏とうぬぐとく
取るかの死取ゆあひど生仕せふ。居邊近く居よせられ。汝を候る
別弟うきだに是より直ふ。また進が宿所ぶひあたて。又よ迫腹切せ
如些と仰うりあらうて誓ひ入へ。くみて死るが萬よ一。又を
救ふ至るべ。どうへ決て些とも強じ。主食かひりどり。上天す
きまど廢人す。孝をりて國を治め。氣とそのく身と備る。和よ誥腹
切せよ。とすよ仰もうへこうぬど。且また進え罪す。右臣を
不かとて。そのすよは。タクんすへ。続井家の断絶へ更よ踵を
めくべくべく。と願くへ平絆が。幸をめぐれて又と尼が。罪スのれ
罪と許させり。君の不とう様。一もんへ憚あれど。の意され
くさんせだ。さうさんよへ只こ重のまにゆ。と圓善も果ぞ。懷劍と
引抜て。左ひの肚へ突きま。吾君大絶よ誓ひをひ。單りとう壯伎
順勝が底意をあらせん。その刃を。引みやうそと違く。みづくら
基代をあらひ。口声を細りて宣へやう。いはる。ほれ。深谷の妖氣を
見て。武とりて是をばんとぞひとく。國流士の大刀をう生じぐ
よ。と老臣どもふ説示せば。脣を郎へゆく。凍め半之進の旗めだ。
口が血を犯せ。刀をえて。深谷赴き。彼の彼如よ自殺して。
主を諂ひとぞぐ。墨裏よはく進が慢て。どう遣へまく。りりゆう
迷青みうちとぞ。あそ知覚て。國流士のうすへひ絶うれども。奪く

あてま進と許そとをへ。家法これうそ。素直やせん。やくづか
順徳が。手の取と佈ろに仰げども。臣とて君す勝と。つゞ
赤根が奉意とせん。且くあま死推糞かたて。又せんとべり
あぐさふ。とろひーが。ワ底意とがちよばして。まえ進へせを
憤う。り自害とするよりや。とろひるすてまセと。地の中へ
捕らへ思愛の辯と被て。まえ進う自殺と禁へ。爲さうとま
らひまや。ま七八又親と。アアアミテ法を犯せば。罪科脇見
限まう日数も果新よ半七がぬと夜の。うれ名まえされば。今更よ
やアとつども。王枕がかししくて。彼ホヌ婦と近つて。もうるふ
すと進と免とめへ免されど。さればとそりうでう。罪あたりのと
届かべ。病者よ卧ようとハ壁やうど。赤根が二男。平治と竊よ
歸て。口が口と育てその又よ。告うさせだやとて。俄頃よアロトセ。
言と設て試よるに。親の危窮とこううゆ。アシが面うよ肚うを切る。
拳を勇敢傳ゆ。惜もよ堪よ。壯俊すれども。その深瘍での助り
かしけん。あくあれど。卑アそ拘死をとらふ。汝父よ代て死をう取
りて。一旦ひつゝ口が憲も達半え進ま七が罪免とぞ道をぬ
た。せあてそのあく苦痛と忍びて。实父の宿所へとぞまに封き。
滑やよ口が憲と傳へ。親子丈婦一生の辞別をもせつけ。と叮嚀よ
仰下されて。几帳よ被よとて。練とみづから取て平治が瘻口を
絞せり。感源数行よ及び。君恩忽地承よ温きて。やうに
ベキ言禁もある。只供辨と供辨と。承よかたれやすよ。遠侍をすづ
生病ひ再發と。却て私利よ私車其甲と招く。竊よ奉の

既と母と妻とよ告させろ。病中の使者されば、穢て齎す所許れど。
親の家のみあるよけど。主君の恩を代へよ。志せどとぞが度ふ。
ぬ自ら演も倣へど。親と對して法外する。舉動をもや曉りて。
君令は重んじゆ。室より父の父さりけり。往方ちるる見半七。
周防より嫁女へ便りあれば平郷が。今果の一匁傳へとぞ。既に
憑き進むべし。母の妻の。僅は三歳の平太郎を。外母前院と
齋して。生育後み生松の家をつけて。ちのとづくも。や秋蟬の。
声うるやく歎きの森よ。三勝を海へん。とど胸の裂りが如く。薄づ
振づ泣叫べば。奥よりよと声立て。は園花又夏山か抱く四人ゆ
るね。駕す三人。轆び生左よ右よ撫うどる。禁歩くぬ。安否の
聞問ふんとも。のぶの身の。凡果もなせ。毎日。身も潔松
べて袖の。両手不一げ。うみ生松と。万葉とす。言祝て。育て今葉
九。初孫もや。举ても。さと一幅の階級も。さうり食せがとうければ。
結句經を駕すの縁。自殺のうれをさせり。新婦も音傳ゆ
諸君よ。生くる。おせんども。只臨終よありやと。うふを慰め
きて。孫携て來れまでも。端ろく生きとりひこと。られば。亮闊一重を
生死の境。りの苦しげよ。宣ひと。嘆て居る。母女房へ苦よ。腸を。
断る。ううう。苦しみ。せかひ。せかひ。娘君み。三人の子
あり。音傳過世のよくら種ぐ。只ひとり。うみ男児の。武藝
文道孝ひ。ゆでん。あまに。拂とも。又人あまに。勝とも。天折とも
ゆくせん。その第一の孝行を。けふ。一日よ盡とも。と返す。ぬと。そくとも
か。そくとも。口詫つ。啖入。背拂ひ。んと。そくとも。ちくらどよろた夏山。

母も痛一已ぶ身のつら。姫さよみが先ざまうて。をやまみ思えても。
四年限の片鷄翼を向の草の原露ち袖と呻んぐ。
昔死して身の主と。良人の心よりにかとる。夕ととんとあら
うべ。三房室を傍り。抱き篭り退て死んどうべ。理ううれど。
乳立よ離と坂平太郎。せりて母親あんみが成長さざつだく。
弓の幅廣くらべ。死ぬのと真女といへんや。絶えんとくる丈の。
临終正氣をめつ。後の世吊ふこそ真女さん。どひへ諭せど毎も
外母も涙よりぬ歎きの数く。嘯室をどの。嚮ふへりとも口さづく。
ひ罵りふ腹ちうけん。かくあづべと志すぬ弓の。とても腰きぬ
良人の運命下さと。弓も苦も自殺して。赤根の寂さりゆく絶
えん。妹の側室となりひるがり。笠松の家されば。平経ま婦もの見
うで。縁坐の尤あたせどと。とてこまゆで争ひぬ。妹とつじ義理
あらへ。理とあらべ悪言。あらべのこよ置ともみさ。かうると
あるみ。妹と姪もる。面びせ物候みれど宣ふ。妹不
隔意のあらびを放。下めようかくと。告ちあらそぞまことあら
う。勧解らる。妹と姪もる。面びせ物候みれど宣ふ。妹不
主君の内意平経が。孝を化ませどと。ひーのそば買酒。ひま
かけまひそ。といひ慰う慰ふれど。憇うね。衰別離苦。三氣
にも耽がち。せいや。母の膝うり遠下す。只片息ふる父の
顔と。さて祝てか。喜と呼び。又祝てか。慶阿と。是や。祝と子
の顔。あらせ不とあうてうと。ちのく因と因注。うと。うと哭バ

こうと泣く。平太郎が声よ平徳へきやま見る眼を開き。母にさ
さうる。夏止も武士の女學よ徳げうれ愁傷。此後通臂泣ぬ
ても。すな泣足うじや吹くもうて。やよ家する夫人。今日こそ用居
用門の赦免状頃戴あれ。と刀の下緒よ縫び著せ見え。すき進
このとれうで。みを又き眼と閉默然とて居りしが免狀と安て
形を改め。双の手に押戴きう。うち用こそ讀くごち。微臣が孤寂
空ううとば。主君教慢のゆこうをひるかく。災害消滅続井
家へ。まもく繁昌去りん候。これ併平徳が忠孝の致と所。が
子るぞり竹帛よ。とめて永く功を賞せん。通奇特と押用。そ
あふぐ扇や言葉の要。それうみゆつて安堵よう。これやうと
取あぐ。又よ推る母女房三傍も諸共よ堪るを。金ハ是を非む。

これら初よ先よとて。炳うつも車のあぐさ。嗚咽をえどみ。
同胞四人遠離をとへ。せ七がうひまらし。も通陶五郎ホが後よ笑べ
まもみ遺憾ううめ。現宣へまくる。うりし。半七のまのへ生て。のま
遠くゆあふされど。尼うそえふ往方あれど。周防とくへ西脇尼外
百里とやらん。二百里とせん。あうと一吹けば花きの翅備ノテ
速の間よ。ふきもかうんでらひゆ。西の天こそ恋しけ。用防奉すや。
山口。青耗もくや。築山の所。う人のまよじと。ぞうぬまも
遙ふる。天も歎の霧兩よ。蓑笠うる大男す。わ戸へうすう
あつ。半之進と信と見て。は進ざふと。ゆる声と共よ蓑笠搔。擲捨
さば下。六腹巻條小手。體當縁類。ちうく。矛と。うせく。領。よ端て
吻とう。息ハ肩うづ搖出。长途の勞乏と見てけき。がま近ひ



忙しく。淨め侍る。柄杖を取て。温湯ゆるわをあがめ。咽喉と澤のんどをせ。めぐらしくね。穂姫ほひめよ冊じをとて。周防山口へ赴く。そや四年。まろども。面會するにようつりし。炊栗耶太郎くりやたろう。注進のうしんとくわく。火急のたゞ。软じんいふく。と縁えんう。小膳こしょんをもじへば。さしつく。言一朝。みのそぎとつとも。その本末を告ナさん。抑陶おのと權頭ごんとう。晴賢けいげんへ大内の權柄けんぱうある。その威けいをもく。主君しゅきみと凌ぐ。されば老臣ろうじん。枝石田えだいり。鷺津さきつ。坂良さかわ。宮三吉みやみつ。松原まつはら。月高つきたか。至る。す。その威けいふもそれて比周ひくせり。あつれし二月のとき。築山つきやまの寺所ていしょよ於て。宝劔ほうけんを拾う。義隆ぎりゅう。されと齋さいと。続井殿つづいどの。贈さしだられし。風流女ふうりゅうじょの大刀おだ。又。續井殿つづいどの。贈さしだられし。風流士ふうりゅうしの大刀おだ。又。反放はんぽう。大和やまと。よし。飛とび。是のん豫よして。岐居きい。風流女ふうりゅうじょの吉良よしらこと。墨囊くろくわ。晴賢けいげん。あり。こぞ家宝くわいぼうと。うん。未嘗みなかつ有の吉良よしらこと。墨囊くろくわ。晴賢けいげん。あり。風流女ふうりゅうじょの一刀いつばと。近ちかに。進すすべ。と。仰あおむ。晴賢けいげん。従ともひ。却かく。伴ともの宝劔ほうけんを。賜さしだ。と。そ。う。義隆ぎりゅう。大刀おだ。怒いかりせ。ゆして。陶とうと。深ふかせんと。も。不せ。冷泉れいぜん。後あと。江良えら。丹だん。後あと。と。後あと陣じんと。中なかよ。抜ぬきで。討うそんと。謀ぼうを。授あたらる。も。よ。江良えら。へつひ。ひゑ。えうう。晴賢けいげん。よ。如此このこと。告おほく。ば。晴賢けいげん。大刀おだ。怒いかり。そ。の。長なが。そ。立た。地ぢよ。そ。ひ。も。ら。す。わ。せん。と。富田とみたの。稚わらわ。山さん。よ。屯とま。し。く。軍ぐん兵へいを。聚あつ。さ。時ときを。移うつ。そ。安穗やすほ。孫まご五郎ごろう。大宰だざい。小貳こまつ。千壽せんじゅ。赤あか月つき。三角さんかくを。そ。下くだめ。と。て。同どう意い。軍勢ぐんせい三千餘よ緒じ。忽すこ也よ。著あつ到いたせり。頃ころを。八月はちがつ廿八日じゅうは。義隆ぎりゅうかくと。

まう一石をば。其猪さへ慰さんとて。寵の法泉寺。三日三夜
御座を移され。狂山の兵を催す。僧妙は晴賢へ。正軍兵等が
生立を。隆昇又人せよ。と。と披衣して。十九日の曉方。法泉
寺へ推りせて。門を咄とつくつ。摶門よりぞ乱と入る。長隆主徒
五十餘人。ひしきざる。と。されば。脱身仮所と殺て。出に入る。あらゆる
賊兵死。或も附落し。突伏薩羅伏瞬間。三十餘人を斬られ。而
敵大勢。されば物ともせど。雁野彈正。就て。伴入道牙門と入りえ
息を。も。絆せど。四方より火を放て。喧叫で攻入。されば宿直の
近習。又。冷泉隆豊。元野德内。三浦戸井田。仁保石田。余。際と
禦箭射。射。之。組で。射。之。あり。かく。又。射。之。射死。そ。の隙。又。隆
朝臣。廣縁。小走り。出。半弓。も。うて。敵と。柱矢種。也。既。よ。射。之。一
口。上口

まうや立け。の雲も。まうそと。ま。風の跡も。残らず。
と。詠じ。猛火の中。よ。走入て。茶毘の煙。と。まう。ひぬ。と。詠。あ。も。

まう。耳を傾け。の。奇く。驚。け。ま。進。膝立直す。陶が反逆を承
乃。基。朝臣。と。槐姫。へ。憲。り。や。坐。そ。づ。ふ。と。聞。きて。炊。粟。と
面。り。げ。小額。を。持。され。が。中。將。義。基。朝。臣。へ。築。山。の。脚。所。よ。笑。せ
く。晴。賢。や。が。て。脚。所。へ。推。よ。せ。迫。腹。切。り。せ。を。多。痛。じ。た。那。姫。乃
に。養。又。持。院。の。一。忍。糸。も。陶。阿。波。又。教。き。ま。ひ。つ。凡。防。長。豊。筑。乃
四。个。圓。ま。晴。賢。よ。属。を。さ。ぐ。べ。天。地。反。覆。時。節。到。本。あ。う。ど。も

槐姫へ貴殿の息女を通じると。仙野呂東ニ又冊見。後門
虎をひいと。惟みゆけど往方をあくべ。主の先途よえあひぬ某
何を面因ふる存余べき。單身りうとも。城軍の中よきアヒア。
モリ死み死なや。どひーが。従賊兵二騎三發。殺そりて死する。
とも。九牛が一毛す。大和へ往進るをや。とおひくにて百四千里を。
僅五日よきのび。つゞきるへひ果す。矛の懈のすじ缺か。
カのど。と腰の刀と肚へつた立て引籠に。庭の井筒へ跳入り。
あて室へり。半之進へ今更よこむと憐み彼をありゆ。
岐捨玉の主家の大事。えうち仰そ歎息。いぬゑ如月
朱谷る。才精豪鳴動。一條の妖火西と投て逝去。と。
獨丈木が告訴する。つとく妙ばかり。原森彼風流士の大刀周防
山口へ移す。内家の仇とおもす。大和よあわせ。禍乃。
遂よ彼外へ移轉す。時あるうね食あるう。こよましく
親實が。ト並井の如だとも。奇シ。奇シ。と嘆賞されど。ニ拂
塞る胸。絶頂。女流すぐら雄みて。お通姫君のあん傍。一旦
城を遁る。とも。往されハミテ。款ろん。加旗陶五郎が。又モヤ属
けん。主ふや属。ryn。篠の答子。紙吹す。母。とつと。子。や。母
苦。乳胸を。穿花。ことと推量す。せめて。す。七。彼外。在。故
あく。ばく。厚衾ぬ。の。けす。でも。存余。り。が。る。翁。奈。乃
猶。釋。よ。も。又。あ。ぐ。き。物。と。惣。べ。海。す。に。夏。ふ。は。そ。よ。す。ひ
絶。が。を。ア。が。所。天。の。も。う。時。も。奇。く。兒。ホ。四。人。あ。絶。共。よ。一。世。ア
厄難生死の際。此。承。よ。つ。モ。親。と。親。の。ほ。こ。う。あり。ひ。せ。う。き。と。

即^{ひき}。益^{ます}るに言^いふ時^{とき}移^{うつ}り。主君の勘氣免^{ゆる}されば直^{すま}に^ま出^でて。車の轍^{じき}告^げす。三勝^{みかつ}を夜服^{よふく}とりて來^こよ。物共^{ものとも}供^{とも}する用意^{ようび}せよ。と仰^{あお}づ。往進^{むかへ}すと呼^よ門^{もん}て幸^{さい}めり。とて。陶^{とう}が反^{そな}達^{たつ}。隆^{たか}に又^{また}手^てふるゆう^う。炊^く票^{まい}が往進^{むかへ}すと手^てや吹^{ふき}ぬ。槐^{かい}姫^{ひめ}の^のく^くりと^と。と述^{のべ}り。とつ^つと^と。官爵^{くわく}高^{たか}に鶴^{つる}の峯^{みね}。大内殿^{だいうち}の紫花^{しは}の姫^{ひめ}。老臣^{ろうじん}陶^{とう}が謀^{めぐら}及^{およ}ふ。學^{がく}て。築^{つき}ひの脚^{あし}所^し。灰燼^{はいじん}と^と。一忍^{いつしん}行^いの入道^{いりとう}す。と。脣^{くち}裂^さけ^くども。槐^{かい}姫^{ひめ}と^と通^つい。と。某^{もし}ことと紙^し冊^{さく}を^をすうわ^{うわ}せ。一方の^{かた}囲^いえ紙^し伐^うひ^うき。幸^{さい}して。小保^{こほ}の御^ごのあきこ^{くる}る。沢川^{さわがわ}の河^かと^と近^{ちか}。

延^{のぶ}一^あ進^{すす}みた^う。けり。み賊軍^{み賊ぐん}隣^隣う^く追^お暮^く木^き追^お暮^く木^き追^お暮^く木^きと^と。と懸^{かか}る。と^と某^{もし}く^く一^いあ^あり^りと^と。且^すく防^{ぼう}を^を残^{のこ}す^す。往^{むか}ふ行^いよ。遂^{つい}て姫君^{ひめぎみ}の往^{むか}方^{ほう}をも^も。も^もく^くは、と^と周^{まわ}章^{じよう}し。と^と人^{ひと}和^わぬ^ぬと^と。と^と十^{じゅう}里^り完^{かま}きの^の度^ど。今^{いま}左^さ々^さくへ^へあ^あよ^よけ^けど。う^うほ^ほん^ん往^{むか}方^{ほう}をも^も。う^うは。顧^{かの}へ^へ姫^{ひめ}を^を因^{いん}由^ゆと^と。然^{しか}りハ^は餐^くき^きひ^ひん^ん往^{むか}方^{ほう}をも^も。時^{とき}と期^こせんと^とて。面^{おもて}見^み浮^{うき}世^よ存^在べ^ま。也^よは^はり^りと^とひ^ひの果^{くだ}。す^すて^て刃^と抜^{ぬき}て。自^じ殺^じせんと^とも^もう^う。半^{はん}之^の進^{すす}急^{いそ}よ^よ推^し禁^{きん}め。櫛^{くしこ}と^と放^{はな}粟^よ耶^や太^た郎^{ろう}が。言^い下^さよ^よ倉^{くら}死^死隕^{おち}る。櫛^{くしこ}と^と死^死した^{した}。忠^{ちゆう}臣^{みん}の不^ふ行^{こう}。又^{また}犯^{はん}せ^せ忍^{しの}び^び才^{才能}を^を保^ほく。と^と直^{ただ}よ^よう^う。一^いつ^つ。播磨^{はりま}美^{うつく}化^か。前^{まへ}後^{うしろ}備^{ぞう}州^{しゆ}姫^{ひめ}の先^{まへ}途^とを^と究^くて。後^{うしろ}の忠^{ちゆう}義^ぎ肝^{かん}要^う。

さんと説諭せが呂東二へ。今更死ぬふえ死すれど。となりへ

かへて刃を收め。ひざまくび引くへて。再て安否を告げやさん。余と

ぞういひうけ。走きを半々進へ。且くとぬびとがめ。とまう

貴殿の腰間。諸費の用意ありと。僕別せんと床間する。鐘振の

蓋うち聞そ。投与する包銀厚志。志滿さるに堪へ。と押戴つ

呂東二へ背をも不見て。歩ゆ。お戸を出て。失う。今畢

り。平地へ。律の容子ふきと激し。口が又出仕すと。お

陶五郎へ。近臣。晴賢が養ふされ。口が君。紗代。あたむりん。欲

不覺と出仕へ危がん。と。赤根へうち。点滅。汝が異見。その

理あり。あれども陶五郎へ。養又。野。死。豫ぞ。あく。汝を

裁。親み。与せ。がる。大事を人傳。やさん。不忠。す。とく

生仕の供立せよ。と焦燥の涙を禁て。三勝が背より被そる肩

衣も。晴きぬらひの晴小袖。見立す。室を花夏。瘞匱の焉

経。惟。父。又。君所へ。子。死出の旅述。ひの。父。三勝。歎。ソヤ

す。周防。女。見。と。妻子。と。ゆ。ふ。も。何。つ。り。く。も。出。て。ゆ。

主。人。と。送。る。奥。と。門。徒。者。う。ら。ぶ。殊。接。箱。奴。隸。ぐ。う。母。と。中。接

藁。の。草。履。穿。ど。よ。遠。く。続。け。く。と。ひ。声。と。ひ。廟。ど。だ。う

不。死。が。撲。だ。と。没。る。死。骸。の。上。よ。身。を。投。す。と。室。を。花。と。夏。と。が

こ。ろ。と。泣。く。こ。と。や。つ。づ。子。の。終。焉。る。ん。と。ど。く。ど。ゆ。亦。こ。う。と。

連。う。び。き。死。背。後。す。と。よ。く。進。へ。喘。く。君。所。を。投。て。き。ま。ぬ。

